

北海道読書推進運動協議会

北読進協だより

第13号 (優良読書グループ表彰特集号)

平成19年3月15日発行



旭川文庫読書会連合会 (優良読書グループ全国表彰)

目次

< 特集 平成18年度優良読書グループ >

全国表彰

北海道表彰

北海道地域活動振興協会理事長賞

特集 優良読書グループ表彰

2000年以降に表彰を受けた読書グループ

読書推進団体の草分けである(社)読書推進運動協議会は、昭和43年から秋の「読書週間」に合わせて「優良読書グループ表彰」(全国表彰)を主催して各都道府県から1団体ずつ表彰してきました。

北海道読書推進運動協議会では、この全国表彰に加えて、独自表彰を毎年行い、地域で活躍する読書グループを表彰してきました。

平成17年度からは、財団法人北海道地域活動振興協会理事長賞も創設され、より多くの読書グループを表彰できるようになりました。

今年の優良読書グループ表彰は旭川文庫読書会連絡会が全国表彰を受賞することになり、北海道表彰、北海道地域活動振興協会理事長賞と合わせて9グループが道内各地において授賞式が行われました。

本特集号では、今年受賞優良読書グループ表彰を受賞した各団体のプロフィールを紹介します。

年度	表彰	管内	市町村名	受賞グループ名
2000	全国 北海道	空知	長沼町	読み聞かせの会「赤とんぼ」
		後志	蘭越町	本との楽しい出会いを創る会
		空知	南幌町	図書室読み聞かせサークル
		上川	旭川市	旭川文庫読書会連絡会
		上川	東神楽町	絵本を楽しむ会「おうまのおやこ」
		日高	静内町	読み聞かせの会「おはなしつくしんぼ」
		十勝	帯広市	こどもの本読書会 青い鳥
十勝	本別町	読み聞かせサークル「すいーとぼてと」		
2001	全国 北海道	胆振	伊達市	きつつきの会
		石狩	札幌市	読み聞かせの会「マーガレット」
		後志	岩内町	絵本の会「トロイメライ」
		十勝	芽室町	水曜おはなし会
		釧路	弟子屈町	絵本のかい おはなしらっば
根室	別海町	読み聞かせボランティア「どんぐり」		
2002	全国 北海道	石狩	石狩市	石狩市文庫連絡会
		石狩	江別市	おはなしなあに
		渡島	松前町	がらがらどん
		後志	蘭越町	おはなしの会「こぐまちゃん」
		空知	栗沢町	ばせり
胆振	登別市	おはなしぼけっと		
2003	全国 北海道	日高	新冠町	読み聞かせの会「びっくり箱」
		石狩	札幌市	読み聞かせの会「ねこやなぎ」
		石狩	札幌市	山の手図書館「おはなしかご」
		渡島	上磯町	えほんの会「えくぼ」
		空知	栗山町	栗山町ふきのとう読書会
		胆振	室蘭市	たんぼぼ文庫
2004	全国 北海道	上川	旭川市	旭川おはなしの会
		渡島	木古内町	絵本サークル ぐりぐら会
		檜山	厚沢部町	館っ子お話の会
		網走	留辺蘂町	読み聞かせ会「あのね」
		胆振	穂別町	穂別読み聞かせの会「ひまわり」
		十勝	帯広市	十勝童話会
2005	全国 北海道	石狩	札幌市	読み聞かせグループ「マーガレット」
		石狩	札幌市	読み聞かせの会「わらび」
		石狩	恵庭市	おはなしさんた恵夢
		上川	美瑛町	お話し会「あいあい」
		網走	北見市	北見お話の会
		胆振	苫小牧市	苫小牧子どもの本の会
	北海道地域活動振興協会理事長賞	空知	三笠市	おはなしの会「グリとグラ」
		胆振	平取町	ふれあいサークル
2006	全国 北海道	上川	旭川市	旭川文庫読書会連絡会
		石狩	札幌市	おはなしの会「てるてる」
		石狩	江別市	風の子文庫
		空知	由仁町	おはなし会「わらべ」
		網走	湧別町	こぐま会
		網走	湧別町	リーディング倶楽部たんぼぼ
	北海道地域活動振興協会理事長賞	十勝	大樹町	図書館ボランティア「どんぐり」の会
		釧路	厚岸町	ちいさな絵本箱
根室	根室市	中高生ブッククラブB・LOVERS		

全国表彰（主催：社団法人読書推進運動協議会）

上川管内 旭川市

旭川文庫読書会連絡会

【団体の概要】

設 立 年 月	1979.4	優良読書グループ表彰	平成 12 年度「北海道表彰」
会 員 数	個人 24 名、団体 6 団体、 通信会員 21 名	代 表 者 名	平 泉 美 智 子 さん

1 団体設立の経緯

本が好き、人が好きで手探りで活動する人たちが、地域に図書館を、文庫を、読書会を立ち上げようとする大きなうねりの中で出会い、昭和 54 年に「旭川文庫読書会連絡会（略称・文庫連）」が誕生しました。ただ集まる“会”ではなく、会と会、人と人がつながりあい、学びあう場と時間を確保する。そんな次の世代に伝えて行くための“連絡会”であることを目指しました。

28 年の活動を経た現在、文庫や読書会の数自体は減ってきたそうですが、小学校を拠点に読み聞かせを行うお母さん方や教育を学ぶ学生さんなど、様々な方々が新しく入会され例会に集ってきているそうです。

2 団体の具体的な活動内容

月 1 回の例会を中心に、会員それぞれが小学校、中学校へ、あるいは図書館、留守家庭児童会、施設、育児サークルそして自分たちの家庭や文庫において、本のよみ聞かせやイベントを通して「本」と「人」をつなぐ活動を行っています。

例会では、新刊書の案内を市立図書館の司書の方をお願いしたり、会員相互の実践報告、ブックトークの学習や決まったテーマによる本の読み合いを行うなど様々なことを行います。また、例会の 2 時間、ゆったりと会員が参加できるよう託児も欠かさずに用意しているそうです。

団体を代表して日頃の活動を多彩な月 1 回の例会報告を中心とした“あさひかわニュース NEWS”は、312 号を数え、通信会員との絆も万全です。

連絡会と図書館

例会の会場には旭川市中央図書館を借りて活動していますが、図書館には場所だけでなく資料を借りたり、リストを作るためのおすすめ本についても相談してみたりと、いつも協力してもらっているのだそうです。また、毎年秋に開かれる図書館まつりでは絵本の読み聞かせやパネルシアターなどでイベントに参加しています。



4 最近の活動から

旭川文庫読書会連絡会の代表平泉美智子さんのお手紙から

「歌は、うたわなければ歌ではない」の言葉どおり、昨年行われた例会“手あそび、わらべうたの集い”では、様々な世代、男の方々も、車椅子で参加下された方もおられ、市外からの講師の方を中心に大きな輪をつくり、みんなでひとつ歌を共有することが出来ました。この齡(?)になってから、その楽しかったこと！これこそ、言葉に出会って間もない小さな人へ、私たちが大切に手渡したいものではなかったか、と改めて思いました。

その例会から一年近くを経て先日お会いした方が、今でもお一人でお茶を入れる時、お茶を飲みに来て下さいと、そのときのわらべうたを口ずさんでおられると伺い、心が暖かくなりました。そんな時、たとえ一人でも、私たちはつながっているのだと思います。

また、今年一月には図書館の“キッズルーム”として生まれかわった旧・科学館プラネタリウムドームにて、オープニングイベントに出演させて頂きました。元プラネタリウムのドームにての読み聞かせ、初めての私たちに不安もありましたが、かつての星空ドームにスライド『双子の星』が浮かび上がった時の「お～！」という子どもたち。その瞳のかがやきは忘れることが出来ません。例えば、そのイベントのために朝早くからストーブをたきドーム全体を暖めてくださったとのこと。皆さんの力で、思いで、大切な言葉の場は保たれ、築かれていくのだ、とあらためて心に銘じ、第二の人生を開いたプラネタリウムの門出を祝う一日となりました。

言葉一つでいとも簡単にいのちが粗末に扱われる今だからこそ、大切に信じ、伝え合ってゆきたいと願っています。

旭川文庫読書会連絡会は、「ささやかだけれど赤字ではない」運営をモットーに、市内の作家の方や市外からも講師を招く一方、手作りのチラシを作って配るなど、自分たちがワクワクするさまざまな企画を自分たちの手で催すことにしています。

この新しいワクワクが一人でも多くの人へ、家庭へ、そして子どもたちへのお土産になるようにと願いながら、今後も活動を続けていくそうです。



北海道表彰

石狩管内 札幌市

おはなしの会「てるてる」

【団体の概要】

設立年月 1984（活動歴 22 年） 活動場所の特色 地区図書館（開館当初～）

会員数 7 名 代表者名 吉井 晟子 さん

1 団体設立の経緯

「おはなし会てるてる」は、読書奉仕のボランティアを育成する講座を終了したメンバーたちによって、昭和 59 年 11 月に結成され、同時期に開館した札幌市の元町図書館において活動を開始しました。グループ名の「てるてる」の由来については、てるてる坊主ではなく、英語の「tell」から名づけられたものだそうです。

近年は、区の保健センターや他の子どもが参加するイベントにも活動の場を広げています。20 年を越える活動は市内でも貴重な存在です。

「てるてる」のメンバー

メンバーは、20 歳代から 70 歳代と幅広いながらも、それぞれの会員が持ち味や得意分野を活かして、互いに刺激しあうことで、年齢差を感じさせない一つの仲間意識で会は運営されています。

数年前には、お話し会に参加する児童が減少してきたことや、会の代表者が転勤によって転居する事態が重なり、存続が危ぶまれた時期もありましたが、設立当初からの会員からの「頑張ってください」との一言で一致団結して会は存続することができたそうです。

それと同時に、それまでのお話し会の時間を午後から午前に動かし、会員相互の勉強会や講習会への参加にも積極的に取り組むなど、それぞれの会員のスキルアップを図るなど、一層の活動のステップアップを図り、現在では子ども達もお話し会に戻ってきて、あの時に活動を続けることができ本当に良かったと感じているそうです。

2 団体の具体的な活動内容

「てるてる」は、札幌市の地区図書館である東区の元町図書館にあるお話の部屋において毎月 2 回の読み聞かせ会を行っているほか、7 月と 12 月の夏休みやクリスマスの時期には、大集会室を借りたスペシャル版のお話し会も行っています。

会では、このスペシャルイベントが行われる会場の大きさに合わせた大型絵本や紙芝居、パネルシアターを用意して、月 1 回の例会もこのイベントの準備に充てています。



また、年 3 回、会の通信誌である「てるてる通信」も発行して会員相互の連絡に活用しています。

心に残ったできごと

お話し会の時間を午前に動かしたこともあり、近年では赤ちゃんを抱いたお母さんの参加が増えてきているそうです。あるとき、すやすやと眠っている赤ちゃんを起こさないように、静かに絵本を読んでいたそうですが、お話が最高に盛り上がるころに差し掛かって思わず子ども達が声を上げそうになったとき、誰からとも無く「しー」と赤ちゃんを起こさないように子ども達が互いに呼び合って、なんともいえない暖かい空気が流れたお話し会になったそうです。



大変だと思うこと

読み聞かせの活動を続けるには地道な努力が求められるそうですが、絵本の選び方には特に気を使っているそうです。会のお話し会では、その日に参加してくれる子ども達の顔ぶれを見てから、楽しんでもらえそうな絵本を選ぶのだそうで、このために会のメンバーは、常に余分なたくさんの絵本を用意しておかなければならないのだそうです。

加えて手遊びやカード絵本、わらべ歌、紙芝居など、どの子どもも飽きずに楽しめるプログラムになるように、構成にも工夫を加えているので大変だとは思いますが、腕の見せ所なのだそうです。

3 団体としての今後の活動予定

会では、活躍の場となっている図書館自体が、市民のニーズに合わせた形で変化していくことを予想しています。しかし、そうした変化の中においても、読み手と聞き手の心の交流という自分たちの原点については見失わずにして、なによりも楽しい時間を提供することを大切に、今後も活動を続けていきたいと考えているそうです。

今回、北海道表彰を受賞したことについて、「子ども達が、お気に入りの絵本に出会えるためのお手伝いが出来れば、と活動を続けてきました。それこそ、お話し会に参加してくれる子ども達の笑顔と拍手に支えられてきた 20 年だったわけですが、思いがけなくいただいた賞で、会員一同驚いて喜ぶと同時に、今後の活動の大きな励みになりました。元町図書館など、活動を支えて下さっている皆様に、特に参加してくれる子ども達に心から感謝したい」とのこと。今後の一層の活躍が期待されます。



北海道表彰

石狩管内 江別市

風の子文庫

【団体の概要】

設立年月	1976（活動歴 31 年）	主な活動内容	文庫活動 （2,000 冊）
会員数	10 名	代表者名	真島 紀恵子 さん

1 団体設立の経緯

江別市の札幌寄りに位置する大麻地区は、設立当時はまだ団地が数多く建ち、子ども達があふれかえっているような若いまちでした。しかし、当時はまだ図書館もなく、公民館の図書室も到底通える場所にはなかったそうでしたが、そんな大麻地区の片隅に「風の子文庫」は昭和 51 年に誕生しました。

誕生のきっかけは、我が子のための絵本が少しあったこと、協力してくれる仲間がいたこと、そして何より幼い頃から絵本が大好きだったという代表の真島さんの夢があったからだったそうです。そして、ついに玄関先の六畳間を利用した小さな私設図書館が作られたのでした。会の名称は、石狩湾から吹き込む風にも負けない元気な子どもが集まるところになるように、との願いから来ているそうです。

2 「風の子文庫」の活動内容

会の基本である文庫活動は、毎週金曜日の午後 3 時間、自宅を開放しています。毎月第 4 金曜日にはおはなし会も開催しています。おはなし会では、絵本の読み聞かせのほか、紙芝居や手遊び、折り紙、工作なども組み合わせた多彩な内容を心がけているそうです。このほかにも、長縄跳びにオリエンテーリング、スイカ割りに「絵本の読み聞かせ」(?)という「夏の野外お楽しみ会」、文庫母の会特製の「絵本かるた」を使った「真冬の熱戦」が繰り広げられる「冬の新年お楽しみ会」など、文庫を中心とした楽しい催しが毎年行われています。



また、地域活動として留守家庭児童会「ベストフレンズ」に出張して行う読み聞かせ会（毎月第 3 木曜日）や市の保健センターで行われる検診時には、乳幼児（4 ヶ月児、1 歳 6 ヶ月児）と母親に絵本の読み聞かせを行ったり、会員がおすすめする「はじめてであう絵本 50 冊」を紹介する小冊子を作って配付する試みも行っています。

出張おはなし会

風の子文庫のユニークな取り組みが、大麻地区にある道立札幌盲学校の寄宿舎で行われるおはなし会で、文庫の真島さんは、「朗読させていただいて」といいます。文庫の初期の頃から25年以上も続いているこのおはなし会ですが、熱心に聞いてくれる生徒さん達に驚かされたり、逆に元気をもらったりしているのだそうです。

例会は、毎月第3木曜日に行っています。この文庫母の会（おひさまの会）では、各自の活動報告や会の運営、絵本の選書から読み聞かせの勉強会を行っています。例会の成果は文庫で発行している「おひさまつうしん」で会員に配付されます。

楽しかったこと

現在は2,000冊を越える文庫の蔵書も創設当時は約300冊。初めの頃は若い家庭で思うように本を買うこともできなかったため、近所の方々から本の寄贈してもらったり、本を購入するために文庫の子ども達とバザーを開いたりしたそうです。以前、自宅の庭を利用して開いた文庫の秋祭りに、なんと100人近くの子どもや大人が集まって楽しんだこともあったそうで、今も楽しい思い出として心に残っているそうです。



3 風の子文庫の今とこれから

主婦3名が自分たちの絵本や図書を持ち寄って開設した市民文庫「風の子文庫」も、昨年誕生から30周年を迎えました。30年間も続いていることについてよく質問されるそうですが、自宅を開放して開いている文庫だから、「いつもの文庫のおばさん」がいることだと答えているそうです。

風の子文庫が、いつも子どもたちの居心地の良い場所であり、いまはまた、赤ちゃんや幼児を連れたお母さんたちの集う場になっている。そして、これからも、絵本を通したゆっくりとした時間の中で集い、子育ての悩みや喜び、子育ての元気が分けてもらえる、そんな場所であり続けることができると願っているそうです。

文庫を運営する真島さんは、文庫の初期から活動しているメンバーも30年を過ぎて高齢者の仲間入りになってきているそうですが、風の子文庫では次の世代が育ちつつあるとうれしそうに話します。

これからも、子ども達が本を読むことを通して友情や思いやり、自然、命の大切さを学んでいってくれることを願い、文庫の灯火を絶やすことなく、人々との出会いを楽しみに、仲間と共に活動を行くことにしているそうです。



北海道表彰

空知管内 由仁町

おはなし会「わらべ」

【団体の概要】

設立年月	1996（活動歴 10 年）	主な活動内容	地域におけるお話し会
会員数	6 名	代表者名	明石朋子さん

1 団体設立の経緯

おはなし会「わらべ」は、平成 7 年に郷土史研究会の事務局長をされていた故小林貢さんに誘われて、現在のメンバーを含む 4 名による読み聞かせを軽費老人ホームで行ったことをきっかけに結成されましたが、地域に住む一人でも多くの子ども達に本に興味を持ってもらうことを願って会の名前は「お話し会わらべ」と名づけることにして平成 8 年から活動を開始しました。

由仁町は、札幌から 1 時間ほどの開けた平野部にある緑豊かな田園地帯にあります。ひょうたんのような形をした町の北側には役場や町の図書館である「ゆめっく館」があり、おはなし会「わらべ」は町の南側にある三川地区において、役場の出張所でもある三川会館において地域の子ども達にお話し会を開いています。

2 団体の具体的な活動内容

会では、毎月第 2、第 4 土曜日の午後 2 時から三川会館においてお話し会を開催しています。おはなし会では、幼児、児童を対象に絵本や紙芝居の読み聞かせを行います。読み聞かせの後には工作や折り紙のような工作会を行って、幅広く子どもたちに楽しんでもらうようにしています。



このほかにも、季節によっては外に出てかくれんぼをしたり、トランプ遊びやお手玉をしたり、

と楽しく参加できて、誰でも遊べるようなプログラムを組むようにしています。

秋には、由仁町の図書館であるゆめっく館主催の青空図書館に、読み聞かせや手遊び等で参加して共に活動しています。

子どもの成長とともに

ある日、駅のホームで列車を待っていると「おばさん、元気かい？」と照れくさそうに声を掛けてくる青年がいたそうです。見上げる背丈のその青年が、お姉ちゃんと一緒にいつも「わらべ」に来てくれていた小さな坊やだと気づくと、頭の中には、次から次へと昔の光景が浮かんできたそうです。

じっとしていられなくていつもお話し会の途中で逃亡を図ってみんなを驚かせていたことや、中学生になっても子ども達への面倒見が良くて好かれていたことなどが、次から次に浮かんで来て、地域で子ども達とふれあう活動を続けてきたことを本当に良かったと感じる瞬間だったそうです。

グループの楽しみ

グループのリーダーは、輪番制によって活動毎に替わります。誰がどのイベントを担当するかは年次計画で決められます。リーダー以外の会員はリーダーをサポートするという決まりになっているのだそうで、ひな祭り、七夕、クリスマスといった恒例の季節の行事を度のように行うかは、担当するメンバーの力の見せ所です。このため、年次計画を作る際には、会員それぞれがどの行事でリーダーになって、どのように子どもたちを盛り上げていくのか、桜もちを作ろうか、ケーキを作ろうか、とそれは楽しみに計画を作っていくのだそうです。



3 団体としての今後の活動予定

会では、子ども達へのお話し会を続けると共に、高齢者施設や町内の老人クラブなどを訪問して、昔話の本屋大型紙芝居の読み聞かせができないかと活動の場を広げることを考えているそうです。

一方で、会員が毎年高齢してきている状況に、後継者の育成についても今後は一層真剣に取り組んでいかなければならないと感じているそうです。



それでも、いつまでも「わらべ」の活動を今後とも続けていけるよう頑張っていきたいそうです。

北海道表彰

網走管内 湧別町

こぐま会

【団体の概要】

設 立 年 月	1989 (18年)	主な活動内容	地域におけるお話し会
会 員 数	6名	代 表 者 名	小 関 み ど り さ ん

1 グループ設立の歴史

湧別町の中心部から10km程離れたサロマ湖に近い芭露地区で活動する「こぐま会」は、平成元年に発足した読み聞かせのグループです。はじまりは、2年生の授業参観時に担任の先生が呼びかけたところ集まったほんの数人のお母さんが行った絵本の読み聞かせでした。しかし、子ども達の反応に「すっかり気をよくした」お母さんたちが中心となって、翌年にはクラス全員の母親が参加して順番に読み聞かせを行う学年PTA活動に発展していったそうです。

こうして広がった読み聞かせの輪は、学級担任が替わった後も有志に引き継がれて、ついには学年の垣根を取り払った形で実施されるようになり、代替わりを越えて現在の活動のスタイルになっていったそうです。

「こぐま会」という名称は、熱心におはなししてくれるお母さんたちに、子ども達が考えてくれた名前だそうです。

2 こぐま会の活動

こぐま会は、芭露小学校における読み聞かせ会を中心に活動しています。以前は、学校の空き教室を利用して放課後に絵本の読み聞かせや簡単な工作会を1時間程度行っていましたが、昨年9月からは月1回第1木曜日の朝の自習時間を利用して3冊程度の絵本の読み聞かせを行っています。

夏休み、冬休みの時期には、地域の児童館において午前中は読み聞かせを行い、会員による手作りの昼食を挟んで、午後は造形活動に取り組んだりしているそうです。

また、学校以外にも、母親学級や新入学児童を対象に行われる就学時健診の際に、保護者に対して実際に絵本を読み聞かせを行って見せるほか、読み聞かせの大切さや読み聞かせを通して得られる喜びについて伝えています。



エピソード

思い出に残るエピソードについて、尋ねたところ二つの話を教えてもらいました。

一つは、放課後に読み聞かせをしていた頃の話です。その頃の参加者の中心は低学年の児童でしたが、部会やクラブ活動を終えた高学年の児童がガラス戸越しに、楽しそうに活動している様子をのぞいたりする姿が良く見かけられたそうです。手まねきすると少し恥ずかしそうにしていますが、いつしか一緒に工作の仲間入りをして、最後には出来上がった作品を大事そうに持ち帰って行ったそうです。現在では、生徒皆が揃う時間帯を利用した朝の読み聞かせだけになってしまいましたが、放課後ならではのノンビリした雰囲気が伝わってくるエピソードです。

それから、12年前(95年)の1月17日、阪神淡路大震災があった当日も「こぐま会」のあった日だったそうです。会のメンバーの中に京都出身の方が二人いて「電話がつかない」「状況がわからない」としきりに心配をされていたことが強く印象に残っているそうです。

幸い心配するような被害はなかったようですが、毎年この日が近づいてくると、当時のことが思い出されて話題に上るそうです。長年同じ活動を続けてきた仲間ならではの雰囲気が伝わってくる話です。



3 今後の活動に向けて

20年近い活動を続けていく中では、「これでいいのだろうか」と不安や疑問をもったことが幾度となくあったそうです。そうしたたびごとに、湧別町図書館や教育委員会の職員に相談を持ちかけ、さまざまなアドバイスを受けて乗り越えてきたのだそうです。(特に「読み聞かせ講座」を企画してもらえたことは大きかったそうです)

さらに、PTA活動から地域の活動へとフィールドを広げる際にも芭露小学校の校長先生をはじめ教職員、地域の人達の協力がありました。町内で同じように活動している「リーディング倶楽部たんぼぼ」のメンバーとも交流を持ち、お互いに情報交換をしたり親睦を深めている事も力になっています。

これからも、「がんばらない」(?)ことをモットーに、肩の力を抜いて「新しいことをしよう」等と考えず(?)、地域のお母さん達が無理なく楽な気持ちで楽しく取り組めることを第一に、そして、「こぐま会」に興味をもっただけの全ての人に背中を押していただきながら、活動を続けていきたいと考えているそうです。



北海道表彰

網走管内 湧別町

リーディング倶楽部たんぽぽ

【団体の概要】

設 立 年 月	1998 (活動歴 8 年)	主な活動内容	図書館読み聞かせボランティア
会 員 数	11 名	代 表 者 名	小 松 初 恵 さん

会 員 数 1 団体設立の経緯

「リーディング倶楽部たんぽぽ」は、平成 9 年当時に図書館の協議委員していたメンバーを中心に音訳ボランティアとして設立されました。その後、平成 14 年から絵本の読み聞かせ活動を加えるなど活動の範囲を拡大してきて、現在では町立図書館を活動の場に、同じ町内で活動する読み聞かせボランティアグループの「子ぐま会」とともに、湧別町の子供たちの読書活動の推進にボランティアの側から支える活動を行っています。

2 団体の具体的な活動内容

設立のきっかけになった音訳ボランティアについては、現在でも町の広報を音訳するテープ作りを続けており、毎月 2 回図書館において録音作業を行っています。

読み聞かせ活動は、毎週金曜日に湧別小学校を訪問して、低学年クラスを対象にした読み聞かせを定期的に行っています。また、図書館で行われる子ども向けの映画会の前にお話しを行ったり、依頼があれば、母親学級や就学児検診、ちびっこ健康広場など子どもやその親が集まるに場所に出掛けて読み聞かせ活動を行なうようにしているそうです。

— 昨年の就学時検診の読み聞かせのために手作りのエプロンシアターを作成して披露するなど、特技？を活かした意欲的に活動しています。

グループの特長

図書館を中心に活動しているので、私たちが今まで続けてこられたのは、図書館の館長をはじめ職員の方の強力なサポートがあってこそと思います。月に一度の読書会では、新しい本や、子どもたちが喜んでくれた本を紹介し合ったり、自分たちが不安に思ってること、疑問点などを話し合っています。

活動を行っていて「楽しかったこと」「大変なこと」は何ですか？

いつも行っている小学校における読み聞かせですが、毎年 3 月になると子ども達から「よせが

き」をもらっているそうです。それを読むと、読み聞かせを楽しみにしている子どもの気持ちが伝わってきて、これからも頑張るぞ、という気持ちがふつふつと湧き上がってくるそうです。



反対に、毎回読み聞かせに使う本選びにはいつも悩んでしまうそうです。そう言いつつも、「読むのも、探すのも自分たちの楽しみなので、大変だと思ったことはあまりない」そうです。

絵本のちから

小学校の読み聞かせでは、毎年3年生の子どもたちには「あらしのよるに」シリーズを週に1冊ずつ読んできたそうですが、6巻目を読み終えた後、まだ7巻目が出版される前のこと。「このまま終わったらかわいそうだから、私たちが続きを作りたい」と、先生に言いだした子がいたそうです。母親学級などでも、紹介した本に感動して涙を流すお母さんに出であったりした時など、絵本の持つ力と読み聞かせによって感動を伝えられた喜びを強く感じる事ができたそうです。

3 今後活動に向けて

「自分たちの活動が自分たちの負担に感じられるようになったら長続きしない」と考え、たんぼぼでは、「子どもたちに元気をもらいながら、楽しく続ける」ことをモットーに今後も活動を続けていくそうです。

そして、「絵本は子どもの物」と思っている一人でも多くの大人に絵本の良さを知ってもらうことが夢だそうです。

北海道地域活動振興協会理事長賞

十勝管内 大樹町

図書館ボランティア「どんぐり」の会

【団体の概要】

設立年月	1994(活動歴11年)	主な活動内容	図書館ボランティア
会員数	13名	代表者名	及川節子さん

1 団体設立の経緯

平成6年に、図書館をよく利用している3人の利用者が図書館に「図書館のお手伝いがしたいのですが……」とボランティアを買って出たことが発端でした。町立図書館では、ボランティアの申し出に、さっそく図書館報の「かしわ」でそのことを町民にお知らせして、ボランティア募集を広く呼びかけました。その呼びかけに集まった20名の町民により第1回の準備会が開かれ、図書館ボランティア「どんぐり」の会が正式に発足しました。

活動の基本は「出来ることを出来る時間に」としながらも、常に子どもたちへの本の渡し方や読書に親しめる工夫を念頭に「子供の心を育てる」活動を続けてきました。昨年度に10周年を迎えるボランティアグループです。

2 団体の具体的な活動内容

土曜お話し会、学童保育所、大樹小学校(中心校)、尾田小学校(郡部)「こあら」の会などは毎月1回定期的に開催しています。内容は、紙芝居、絵本の読み聞かせ、手あそび、わらべ歌、詩の朗読、折り紙教室などで、30分から1時間の活動です。

図書館では、図書館にある壊れた本の修理をしたり、町の広報の音読テープ作りも行っています。

他に、町内のイベント、老健施設の敬老会、節分などの行事、町内のボランティアのつどい、十勝子どもの本フェスティバル、他町村の図書館行事への参加など依頼を受けて参加することも多いのです。その時は、内容を少し拡大して、大型紙芝居、大型絵本、パネルシアター、エプロンシアター、カーテンシアター、手あそびなど、公演時間に合わせてプログラムを組んでいくようにしています。

「兎に角、お声がかかればなるべく都合を付けて参加いたします」と、参加する多くの方たちの喜ぶ顔を見ることを楽しみにしているそうです。

毎月発行している「どんぐりつうしん」も第146号(2007.1.13)を越えて続いています。



楽しかったこと

毎年、町内の尾田小学校で行われる「おはなしいっぱい、夢いっぱい全校集会」という学校行事に参加しているのですが、会には後日、その時の感想を思い思いの絵やお礼の手紙が毎回贈られてくるのだそうです。この子ども達から贈られてくる素直な気持ちや感動がつづられている手紙を読んで、「本当にうれしくなる」と同時に次の活動への大きな活力に結びつくだそうです。



また、町外の帯広市などにも公演に出かけたときなど、食事をしたり、ティータイムをとったりと、同じ仲間と過ごす楽しい時間も、会を続けている重要な楽しみの一つなのだそうです。

大変なこと

現在、会員は20代から60代まで幅広く参加して活動を続けていますが、フルタイムやパートタイムの仕事を持っている人、また、家族の介護が必要をしている人など、平日の活動の調整は結構難しくなっているようです。それでも、「大変なのはお互いさま」と、お互いが補いながら、何とかやりくりして、活動を続けているのだそうです。

3. 今後の活動予定

昨年、(財)北海道新聞社会福祉振興基金による道新ボランティア奨励賞を受賞することができたので、今年はその助成金25万円を利用して、高齢者も障害者も演奏できるというドイツ製のヘルマン・ハーブをさっそく注文しているのだそうです。今年には絵本の読み聞かせや詩の朗読のバックに音楽を流して演じてみようとか、皆張り切っているそうです。

乳児とお母さん対象の「こあら」の会、老人健康施設や老人ホームでの公演、町のイベント「柏林公園まつり」でのどんぐりの会のバザー出店、このまつりには子ども向けに、テントを張って、その中で1日3回、大型紙芝居、大型絵本、手あそび、折り紙などをして子ども達と楽しむそうです。また、社会福祉協議会主催の「ボランティアのつどい」にも参加するそうです。

こうした、まちにある施設、まちの人たちが集まる行事に参加して、本当に多くの人達とふれ合うことが出来たとき、そんな時には地域の中でともに歩んでいることを実感するのだそうです。

今後も、「地域に根ざした活動を地道に続けて行く」図書館ボランティアグループにより一層の期待が集まります。

北海道地域活動振興協会理事長賞

釧路管内 厚岸町

ちいさな絵本箱

【団体の概要】

設 立 年 月	2000 (活動歴 6 年)	主な活動内容	読み聞かせボランティア
会 員 数	19 名	代 表 者 名	川 崎 優 子 さん

1. 団体設立の経緯

厚岸町は、豊かな海の恵を与えてくれる厚岸湖を囲む『歴史と味覚の町』で、人口はおよそ12,000人。町の中心部にある湖を挟んで湖北地区と湖南地区に大きく分けられており、両地区の間には厚岸大橋が架けられています。

発足当初の「小さな絵本箱」は、湖北地区にある真龍小学校のいて、その母親が行う読み聞かせ活動的なものだそうで、もともとは学校のPTA活動の一環から始まったということです。

その後、湖南地区にある子育て支援センターに通う若い母親の中から『子どもに絵本の楽しさを伝えたい』という有志が「小さな絵本箱」に集まり、湖南地区でも読み聞かせが出来そうな状況になってきたこともあって、平成16年からついに湘南地区に位置する厚岸小学校でも始めることになり、活動の輪が広がることになりました。

その後も会では、活動の場を町立のデイサービスセンターや、民間のグループホームへの訪問などへと、子どもだけでなく高齢者にも読み聞かせの場を広げています。

2 活動

現在の「小さな絵本箱」は、この湖を挟んだ両小学校において昼の中休みに行う読み聞かせを中心に、せ会、子育て支援センターにおけるブックスタート開催時の読み聞かせ、デイサービスセンターでの読み聞かせなどを行っています。

例会は、毎月1回定期的に開いて、活動の日程を決めたりするほか、会員相互の情報交換の場になっていて、活動に対する感想を述べ合うなど勉強の場ともなっています。

近年、0歳児の乳児に読み聞かせをする町のブックスタート事業に参加するようになってから、会では布絵本やパネルシアターを製作する製作部門(!)を作ったそうで、これからも発表できる作品の幅を広げていきたいと話しています。



3 厚岸情報館と「小さな絵本箱」

「小さな絵本箱」は、活動歴 6 年と浅いながらも、乳幼児から高齢者まで幅広い層に対して、読み聞かせ活動が続けるグループへと急成長(?)を遂げてきました、短期間のうちに成長した活動の陰には、「こんな活動もやってみたい」という会員の声や活動範囲を広げるためのメンバーの不足分を、厚岸町の図書館である「本の森厚岸情報館」がボランティアメンバーの募集を呼びかけるなど、活動の面でサポートしていることも大きいのだそうです。



車の両輪のような図書館と市民のさまざまな活動が、これからも町の読書活動を強力に推進していくようです。

4 まちづくりに深く関わる読み聞かせボランティア

読み聞かせの活動がまちに広く知られるようになると、今度は「小さな絵本箱」に向けてさまざまなボランティアの依頼が舞い込むようになって来ているそうです。障害児(者)を持つ親御さんに、就労や地域での交流、余暇活動への参加の機会を提供しようという『レスパイトサービス事業』では、活動中の親御さんに代わって障害を持つ子ども達に読み聞かせを行うなどのサポートに参加するなど、町で行われる福祉事業等の分野にも最近はお手伝いに行く機会が増えてきました。

中には、「レスパイト事業」に参加していたボランティアの方々が入会したり、デイサービスにおける読み聞かせを体験した障害を持つ女の子が「自分も読み聞かせをして、お年寄りの皆さんに喜んでもらいたい」と小さな絵本箱の会員になって、彼女の通所日に合わせた活動も行うなど、さまざまなボランティアの方が、それぞれ参加しやすいようなきめ細かな運営も特色なようです。

昨今、子ども達への虐待、いじめ等のニュースが報道されない日がない、といってもいいくらいになり、胸が痛くなる事件が数多くなっていますが、会では、「そんな時代だからこそ、絵本や童話を通して世界に類を見ない美しい言語である日本語で大人も子どもの心豊かな情操をはぐくみ、子ども達と一緒に日々成長していきたい」と考えているそうです。



北海道地域活動振興協会理事長賞

根室管内 根室市

中高生ブッククラブ B・LOVERS

【団体の概要】

設立年月 1991年(活動歴15年) 主な活動内容 読書、雑談、ボランティア

会員数 9名 代表者名 對馬 涼 さん

1. 団体設立の経緯

根室市は、北海道最東端に位置する人口3万1000人余りのまちです。戦後間もない昭和24年に開館した公民館図書室には、市民による一戸一冊献本運動によって1,000冊もの図書が寄せられたことにも現れているように、市民の読書意欲が非常に高い読書のまちです。

市内に存在する読書会の数は約20にも上り、団体数は旭川市に次ぐ全道2番目となっています。そんな根室市民の読書意欲の源となっている市立図書館では、毎年小学1年生になる児童と母親がペアで参加する親子読書会を募集するユニークな取り組みを行っています。

結成2年目以降は自主活動となるこの親子読書会を経験して育った子ども達の発案により平成3年に発足したのが、全道初の中高生読書会「B-LOVERS」です。読書会ではなくブッククラブと称しています。

2. 団体の具体的な活動内容

会の活動内容は、「本を読んだり、いろいろと雑談したり、ボランティア活動などをしたりします」(入会案内?より)とあるとおり、市立図書館を活動拠点に「神話」「科学の本」といったテーマによる読書会を毎月開いて、自由に感想を述べ合っています。

また、会員が持ち回りで作る会報も現在150号を越えて発行を続けており、イラストあり、エッセーありと手書き文字で個性豊かな楽しい内容の誌面を作り上げています。

ボランティア活動は、古本市に他の読書会と共に参加するほか、メンバーで持ち寄った日用雑貨や衣類で独自にバザーを開き、会の活動資金を自らの活動で作り出すなど、若さあふれる活躍が光ります。

古本市と読書会活動

根室市では、市内の読書団体が「古本市の会」を結成して毎年6月に古本市を開いています。今年で34回を数える古本市では、献本の呼びかけに市民から寄せられた古本を売った収益で毎年数多くの絵本や児童書などを市立図書館に寄贈しています。「B-LOVERS」のメンバーも毎年参加して、その活躍は形となって次の世代の子ども達へと届けられているそうです。



B-LOVERS と市立図書館

会報に「いちこお姉さんから」のレギュラーコーナーを持つ市立図書館の松永さんから、今回の受賞にあたっての喜びと会のメンバーへの励ましの手紙が寄せられているので紹介します。

「公共図書館では北海道で唯一の「中高生の読書会」が私たちの図書館に誕生する！」そんな興奮と期待に胸躍らせた発会から、早や 15 年という時間が経過しました。

中学生から高校生、13 歳から 18 歳というほんの 6 年間に過ぎない個々の生徒たちの地道な活動が、年齢や学年を超えて受け継がれ、いつしかこれほどの大きな流れにつながるができるということを「B-LOVERS」は体現してくれています。

この間に巣立っていった 100 名近くにも上る愛しい根室の若者たちは、いずれも自分の夢に向かって羽ばたき、そして、誰もが胸の中で「B-LOVERS」の経験を、仲間たちと過ごした時間を忘れられない宝物と大切にしてくれている。いつもそばにいて、逆に「B-LOVERS」からもらうことができたこの幸せな時間を共有できたうれしさというものは何物にも代え難いものなのです。

現在の会員は来年度の高校卒業でピリオドが打たれてしまうので、新たな仲間の獲得が急がれるところですが、どうかあわてないで、誰もが自然に参加したくなるような、これまでの自主活動をより一層充実させた、また仲間との交歓をこれからも持ち続けていって欲しいと思います。

これからも、一人一人の個性が生き生きと発揮され会の仲間の中で呼応し触発しあう、そんな素晴らしい体験を大切に見守って、図書館も快適な空間と真心を込めたサポートで少しでも後押しできればと改めて心に誓っています。それぞれのかけがえのない人生への豊かさと、未来への夢の羽ばたきに大きな力となることを……。この 15 年間で共にして。

根室市図書館 担当 松永伊知子

3 B-LOVERS について ~ 受賞のことばより (敬称略)

「(元々)読書は大好きだったので、中学入学時に B-LOVERS に誘われて本当に嬉しかった。(入会してからは)多くの本や先輩、友人に出会い、影響されました。」
(對馬涼・会長)

「B-LOVERS では、沢山の本に触れられることはもちろん、普段自分が絶対に開かないような本でも、ここにいれば興味を持って読むことが出来ます(中略)本の好みの変化だけでなく人間としても大きく成長できました」(佐田絵梨菜)

「私たちの力は微弱ですが、こうして多くの人々に活動を知ってもらうことによってさらに心強いこととなりました」(松崎哲男)

「B-LOVERS ではいろいろなジャンルの本を読み(中略)読書の幅が広がりました。古本市や、バザーなどいろいろな図書館のイベントにも参加しています(宣伝?)」(下岡優美)

「これからも図書館のため、根室市の人のために働きかけて行きたいと思います」(佐々木萩平)



「まさか、このような活動を評価していただけるとは、思いもしませんでした（中略）私もこのB-LOVERS に入って良かったと思います」（木村成美）

「今回の受賞は心外であります。我々よりももっと良い読書会があるからです（中略）皆本は読むのですが「会に入ってまで」といった感じです。しかし逆を言えばB-LOVERS の拡大は読書を広めること」（山本健太）

「和室で行われる例会。タタミの上で読む。どちらも大切な文化である（中略）穏やかな空気の中で、心を豊かにしてくれる本たちに囲まれて過ごす読書会は至福の一時となりました」（石垣茉莉）



図書館ボランティアどんぐりの大型紙芝居

北読進協だより 第13号

発行年月日 平成19年3月15日

編集・発行 北海道読書推進運動協議会事務局
〒069-0834 江別市文京台東町4-1番地
北海道立図書館業務部市町村支援課内

TEL 011-386-8521

FAX 011-386-6906
